

---

frontier world

フラフラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

frontier world

### 【NZード】

N0162N

### 【作者名】

フランフラ

### 【あらすじ】

ちょっととした遊びのつもりでゲームのキャラをランダム作成した俺は、気付けばそのゲームの世界に迷い込んでいた。…ランダムの弊害で致命的にバランスの悪いキャラクターの身体で。しかし、バランスの悪さも武器になる！さあ、今日も最強目指して頑張ろう！「え、ちょっと、近距離戦は無理…こっちくんな！前衛！助けてー！」主人公は段々強くなつていく予定ですが、最初はやたら弱いです。最初の話がひと段落するころにはそこそこ最強かと。

いつも、ハラハラと申します。

更新速度は期待しないでトドロ、ええ。

—王国建暦 893年。

神は、我らに大きな試練をお与えになつた—

神聖大陸セイラント。

王国建暦元年以来、人々は統一された王国で変わらぬ日常を送つていた。

諸国の一によつて訪れた平和は、貴重な平穏と緩やかな停滞をもたらした。

王国建暦 893年。

王国辺境の都市が壊滅したとの連絡が入る。

未知の魔獣による襲撃が原因であつた。

王国が支配しているのは大陸の一部であり、東方には人跡未踏の大地が広がつてゐる。

人口と比すれば国土の広さは十分で、未開の地を開拓する労力と危険を避けていたのだ。

調査の必要性が叫ばれた。

そして、そんな声に自らの道を見いだす者たちがいた。

「冒険者」と呼ばれる彼らは、仲間を見つけ、技術を磨き、危険な秘境に踏み入つていった。

ある者は未知の鉱石を持ち返つて莫大な富を築き。

ある者は太古の遺跡から不可思議な技術の産物を発見してその勇名を轟かせた。

また、多くのある者たちは凶悪な魔獣の牙にかかり。

ある者たちはその姿を消した。

「冒険者」は、栄光と危険に満ちた仕事だった。

だが、人々は前人未踏の秘境を目指した。

己にいそはいつかその名を轟かせる未来の英雄だと信じて。

—そしてまた、今日も一人の青年が辺境の地に足を踏み入れる—

新作RPG、「frontier world」の、その解説文は俺を惹きつけてやまなかつた。

発売される1ヶ月前からそわそわし、前日の夜に至つては遠足前の小学生もかくやといふ落ち着きの無さだつた。

…諸事情により友達が極端に少ない俺は、昔からゲームの世話になることが多い。

特に、RPGのように別の世界にのめり込めるゲームが好きだ。

今いるこの窮屈な世界から、自由な広い世界に飛び出す感覚が何よりの楽しみである。

そんな俺にとって、自由度の高さが売りの一つであった「fron tier world」は理想の新世界だつたのだ。

そして、現在12月23日。

当然予約開始日に予約したそのゲームディスクは今、俺の手の中に  
ある。

発売日である今日、家の近くのゲーム店で製品を受け取り、期待に胸を膨らませながら帰つて来た。

血毛に上がった俺は、汗一滴も脱がずにそのままアビの前に陣取ると手にあるパッケージを開く。

現れたディスクを一撫でし、ゲームハードのスリットに差し込んだ

Gameを選び… オーブニングマーティはスキップ、現れた選択肢から当然New

「うわー！？」

表示された画面にはCharacter Makingの文字。

…だったが、ボタンを連打していた俺は何も決めないうちに設定終了してしまったらしい。

画面には、A 1 1 R a n d o m ? と表示されていた。

すぐにキャンセルしようとしたのだが：

「まてよ、全てランダムつてのも面白いかもな。」

そのままY e sを選んでみることにした。

カーソルをY e sに合わせて決定。

その瞬間—

俺の視界は強烈な光で真っ白になり…

俺の住む狭い部屋の中から、人の影が消えたのだった。

人影の無い室内。

点けっぱなしのトレーブル、一つの警笛文を表示し続けていた。

—ランダム作成は、コンピューターを使った完全なランダムでの作業のために、致命的なレベルでバランスの悪いキャラクターが作られる場合があります—

—では、あなたの冒険者生活に神のお導きがありんごを—

空が、青い。

どこか遠くの空で鳴いているだろひ鳥の鳴き声を聞きながら思つた。

穏やかな風に辺りの草原の下草がサラサラと揺れている。

そこまでの情報をぼんやりと処理した俺の脳は、そこまでやく本格稼働を始めたらしい。

… うー、 どーだ？

何故か節々が痛む体を起こし、周囲を見回す。

前ー だだっ広い草原。

右ー だだっ広い草原。

左ー だだっ広い草原。

後ろー だだっ広い草原。

結論ー 僕はだだっ広い草原にいる。

… 現状の整理をしてみたが、何の発見もなかつた。

どうなつてゐる？

俺は確かに自分の部屋でゲームを始めたよつとしていたはずだ。

面白半分にランダムでキャラクターを作ったのも覚えている。

それが、どんな経緯を辿ったら草原に寝つ転がつて眠りこけてる状態になるんだ？

混乱状態の俺だったが、とりあえず立ち上がりつと尻を浮かし…

そこひでようやく自分の状態に気づいた。

「服が…変わってる？」

思わず声が漏れる。

今日の俺の服装は、いつも通りのジーンズにシャツだったはずだ。

断じてこんな革製の手甲なんてつけていなかつた。

ついでにいえば革手袋なんてしてなかつたし、体にもこんな…胴鎧？みたいなものは着ていなかつた。

同じような意匠の革ブーツも同様である。

なんだ？狐…といつには洋風趣味なので妖精にでも化かされたか？

しかし…この鎧、初めて見たけど見たことあるような…？

うーん。

何だつたかなあ～？

…まあいいか。

俺はあいつを止めた。

「…がどこかも何が起つたのかも分からぬのだ。

服なんか後で良からう。

よく考えてみると、こんな不可思議な状態なのに特に慌てる事もなぐのんびりと考え込んでいいの状況が既に異常だった。

だが、不思議と違和感はない。

何故ここにいるのかは知らないが、なるべくしてなつたような気がするのだ。

…もちろん、只の現実逃避という可能性もあるが。

と、思考がそこまで迷走したといつもいつまへつ有用な情報を思い出した。

この服装…わざわざまでやつていた（正式には始めようとしていた）ゲームである「frontier world」の主人公の初期装備じやないか？

このやたらと凝つた装飾の入つた手甲なんか見覚えがある気がする。

そしてこの胴鎧、形狀から配色まで記憶と一致する。

間違いない、あのゲームの初期装備は全て革製で、こんな感じだつたはずだ。

後は各種ステータスに割り振った初期選択ポイントによってキャラクターの得意、不得意、そしてなにより初期武器が決まったはずなのだ。

今いる場所を「frontier world」だと仮定して、少し解説を入れよう。

「frontier world」には最初から決まった職業だとか戦闘タイプは無い。

プレイヤーには最初に100ポイントのステータスポイントが「えられ、そのポイントを幾つかの選択肢に割り振る事でそのキャラクターの得意、不得意を決めるのだ。

例えば、前線で剣を振るう戦士を目指すのならば、物理攻撃力にボーナスを持つ筋力、「St」 という選択肢にためのポイントを割り振る事になる。

この際重要なのは、ポイントを極端に割り振ったところで初期の数値は他よりは高い程度であるということだ。

ステータスポイントはあくまで「適性」を決める儀式であるから、最初から極端に高いステータスを持つ事は無い。

当然、「St」にポイントを極振りすれば、そのキャラクターが成長するに連れて恐ろしい勢いで筋力、つまり物理攻撃力が上がつ

していくだろうが、逆にその他のステータスは伸び悩むだろう。

「frontier world」において完全なキャラクターは存在しないのだ。解説終わり。

…気づいたら見知らぬ場所で、ついでにいつの間にかさつき始めようとしたゲームの服装となれば、ステータスとか武器とかもゲームの通りってオチなのか…？

60

おいおい勘弁してくれよ、ただでさえ初期の装備とステータスなんかで突然放り出されて不安どころじやないつてのに…

どーしょ、ランダム作成だよ。

しかし…本当にゲームと関係があるのか?

偶然、同じような服装つてだけでは…

いや、そもそも何でこんな格好なのかも… というかほとんど全てが分からぬのだ。

全く何もかも分からぬ状況よりはある程度の前情報があるゲームと同じ世界だと考えたほうが都合がいい。

違つて証拠が見つかるまで暫定的に「frontier world」に迷い込んだと考へよ。

そうと決まればまずはステータスの確認か。

…あれ？ステータスってどうやって調べるんだ？

取りあえず。

「ステータス！」

「開けステータス！」

「ステータスウィンドウ！」

「オープンステータス！」

「ボタン！」

…色々試してみたものの、恥ずかしいだけに終わった。

自分の得意、不得意が分からないうてゲームでは致命的じゃないか？

打たれ強い戦士タイプだつたらいいが、魔術師タイプみたいな後衛型だつたら目も当てられない。

障害物も何も無い草原で紙防御の魔術師一人は流石に勘弁して欲しい。

ゲームの世界ならば間違いなくモンスター、つまり敵がいるはずなのだから。

ポイントの割り振りが前衛タイプならば高い（だろう）身体能力で逃げるなりぶつ叩くなり出来るだろうが、後衛型ならばそれらの選

沢辺は厳しいだろ？。

だだつ広い草原じゃ、隠れる事も出来ないだろ？…

そもそも魔法なんて使える自信がない。

使う才能…というか能力があつたとしても、使い方もわからん魔法なんかで戦闘がこなせるとは思えない。

いや、悲観的思考は止めよ？。

もしかしたらとんでもない身体能力が備わっているかもしれないし。

…まあ、なるよ？となるや。

難しく考えるのを止めた俺は、東京じゃ見たことも無い真っ青な広い空に向かって大きく伸びをした。

と、そこで気づいた事があった。

「ん？」

なんだ？。

背中に違和感がある。

後ろに手を回してみると、硬い感触。

…あれ？俺さつさまで背中で背中でして寝てたよな。

とこういふ疑問はまあ、あとにする。

もしかして……剣か！？

身を守る事の出来る武器が手には入ればかなり心強い。

慌てて自分の体をよく見ると、太めの革紐が肩から右肩から左の腰辺りに抜けている。

革紐を回すように背後の物を田の前に持つてくれると……

「ゆ、弓……。」

弓だった。

よし詳しく述べると、古ぼけた木製の弓。

……弦、切れかかつてないか？

こんな武器で生き延びられてことか……？

いや、しかし仮にも主人公の武器だ。

それだけでは無いはず……だよな？

と、呆然としていた俺の耳に、不思議な音が届いた。

続いて目の前に浮かび上がる半透明の文字列。

—サクトは《古ぼけた安物の木製弓》を入手した—

—全ての初期アイテムが揃つた—

…え、なにそれ怖い。

俺は無意識に呟いたのだった。

手に入れた武器のあまりの貧弱さにしばしトリップしていた俺だったが、数分後に再起動した。

「まあ、まあ、無いよりマシだし? むしろ遠距離から無双出来るかもしないし?」

…自分で言つて悲しくなつてきた。

「frontier world」も元々ゲームであるからして、発売前に テストがあつた。

…まあ、普通は テストといえばネットゲームがするものだが、「frontier world」はかなりの製作費をかけた大作だつたため、失敗が許されなかつたのだろう。

当然、俺も応募したものの選ばれることはなく、幸運にも テストプレイヤーに選ばれた人々の多くがネット上に載せた様々な評価や事前情報を眺めていた。

俺の「frontier world」の少ない知識はここからきているのだ。

その情報の中に、一つの定説がある。

すなわち

『つて最弱じやね？（笑）

剣と魔法のこの世界での『』の位置付けは、悲しいくらい中途半端な武器だった。

『』であるから近接戦は不可能だし、射程距離は長距離魔法に負ける。一撃の威力は攻撃魔法と比べものにならず（当然低い）、汎用性やら対応力に至ってはもう笑うしかない。

『』に矢を飛ばす以外の使い道なんてないし。

はあ。

手に持つ『』を眺めてみるが、当然どんなに眺めても変化などあるはずもない。

「はあ。…せめてこの『』の性能がわかれれば…いや、普通の『』つもあつ！」

最後の奇声は目の前に現れたやっぱり半透明の文字列に対するものだ。

—『古ぼけた安物の木製『』』—

その名の通りのボロい『』。『』として最低限の機能を持つ一品。まあ、最低限の機能しか持たないとも言える。まずは矢の調達から始めよう。

「矢はついてねーのかよーー！」

突つ込んだ。

全力だつた。

何だろう、確かに気づいてみると弓しかない。

弓矢、じゃないただの弓だ。

解説文には悪意を感じるし。

あれ？ 田から汗が……

「はあ……」

俺は、本田三回田のため息をこぼしながらひたすら草原を歩いていた。

進んでも進んでも景色は変わらないが、前には進んでいるはずだ。

多分。

爽やかな気分などと比べて過ぎ去り、青い空も曇りしげだけのものになってしまっている。

「空気がマシなんだろ？」

ぽんやりと取り留めもない事を考えながら機械的に歩き続けている。

全く…何でこんな事になつたんだか。

持つてた武器は役立たず…？

「なんだ？」

田の前が揺りいでいる。

見たところ、俺の前…どのくらい離れて…のか分からな…がとにかく前方の空間が揺らいでいた。

よくよく見な…こと分からな…小さな波が、何もない空間の一点を中心…に…元…的に走つて…る…んだ。

揺らいで…る空間の先は今まで通り無限に続く草原が広がつて…いた。

なんとなく辺りを見回した俺は、やつ…と近づいて手に持つた…の先を近づけて…みる。

「…うわ…！」

「何の前触れもなく」の先端少しが消える。

慌てて引き戻すと『』の先端も現れた。

ふーむ。

少々勇気を出して、今度は指を差し込む。

特に痛みも無く搖り引きを通り抜けた俺の指は、やはり消えたよつて見える。

これはつまづ、別の空間に繋がっているといつ事なのだろうか？

意を決して、頭を突っ込んだ。

思わず皿をつむつてしまい、そのまま何歩か進む。

そして、ゆっくり皿を開くと…

「…今度は森の中かよ。」

森だった。

誰がどう見ても完璧に。

そこには中に高い木が生え、足元は湿った落ち葉と土。

所々に毒々しい赤や黄のキノコが顔を出している。

…あれ？状況悪化してないか？

い、いや。とにかくあの無限の草原から脱出出来たんだ。

大きな進歩だね。

そう、例え正面からピンク色の巨大熊が走って来ても。

ははは、そうや。きっとあの熊は寂しがり屋なんだな。

久し振りの人間に興奮しちゃつたんだな。

…まあ、あの雰囲気を見るに「人間」と書いて「エサ」と読みそうだが。

うん、逃げよ。

「あやあああ――――――！」

「グオオオ――――――！」

ヤバい、超怖い。

どんどん距離詰めてくるつ――

「こっち来んなア――ツ――！」

「グルオオオ――――――！」

「お返事ありがとオ――――――！」

マズい、息が続かない。

そろそろ限界だ。

やつと草原を出れたのになんて仕打ちだ。

「ツ、！ハツ、ハツ、ま、ずい、」

死んでたまるかよ！

俺は、最後の攻撃に出るために息を整え始めた。

え？ 前のはしーかーて？

氣にしなし氣にしなし

さて、おおいたいふ距離を詰められたかこゝの準備も整つた

レバ

七  
〇  
！

うん、まあ助けを呼ぶくらいしか出来ないんだけどね。

「グルオオオオ――――――！」

「ええい！お前に語ったんぢやないやい！」

熊に向かつて叫び返しながら再び速度を上げて走り出す俺。

既にドジドジとこつ熊の足音がはつきりと聞こえる。

そして…

「ツー！」

「オオッ！」

風切り音ことつて転がると、耳元をピンク色の暴力が抜けていった。

追いつかれたか。

逃走の無駄を悟った俺は、後ろを振り向くピンク熊と相対する。

俺の行動に対し、ぐるぐると喉を鳴らして唸りつつ身構える熊。

正直チビつそつだが、ゆっくつと身を屈める。

目は熊の顔を睨み付けたまま（虚勢）、手先で地面を探る。

ジリジリと近づいてくる熊から慎重に距離を保ひつつ、俺は背中から『古ぼけた安物の木製』を引き出した。

熊に向かつて慎重に構え、拾つた石を弦に当てる。

…キリキリキリ…

集中……集中……

転ばないよう細心の注意を払いながら後ろにトドがり続ける。

同時に、熊の目に狙いを付けた。

不意に、熊がその場に止まる。

俺も足を止め、『』での狙いに全ての神経を傾ける。

飛びかかろうとしたのか、熊がほんの少しだけ身体を沈ませた。

その瞬間——

ビシュツ……

俺は石を放った。

石は、思った以上に真っすぐに綺麗な軌道で空を切り裂き……

熊の眉間にぶち当たった。

「ゴツ、とこう鈍い音が響き、熊は……

「グルルオオオ——！」

怒った。

…残念、ここで田を潰せれば相手は野生動物だ。

逃げてくれるかもしぬなかつたんだけどな。

どこか達観したような諦めの心境。

俺は、熊がぶんぶんと頭を振った後、怒りの色もあらわにこなして向こう直るのを見ていた。

熊は、四本の足をたわめ、俺に飛びかかろうとして……

俺の目の前に銀光が走った。

「グ……ルル……オ……」

呆然と立ち尽くす俺を最後に睨んだ熊は、弱々しい末期の声を上げて前に突つ伏すように崩れ落ちた。

倒れた熊の背後には、いつの間にか鎧の塊が立っていたのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0162z/>

---

frontier world

2011年12月1日19時48分発行